礼拝説教（2023 年８月 13 日）

説教者：中村信哉

私たちが誇りとすること

コリント人への手紙第二１章 12-14 節

はじめに

今日は、月の第二週なので、「コリント人への手紙第二」からお話をします。今日の聖書箇所で特徴的なことは、「誇り」という言葉が三回出てくることです。「誇り」とは、「自慢に思うこと」「誇らしいこと」「得意げなこと」を意味します。

人に何かを「誇る」ことは、人に良い印象を与えることも、悪い印象を与えることもあります。自分で自分のことを誇ること、それを「自慢」と言いますが、人に悪い印象を与える「誇り」とは、そのような「自慢」を聞いた時ではないでしょうか。「自慢」は相手に不快な思いを与えます。しかし、私たちはよく「誇りをもって生きなさい」という言葉も耳にします。また何か活躍した子を持つ親が、「この子は私にとって誇りです」と言って感激している姿を目にします。「誇る」ことは、すべてが悪いわけではないように思います。どんなことでも一切誇ってはいけないということではないように思います。実際パウロは、今日の聖書箇所で、自分が「誇り」とすることを語っているのです。私たちは、誇るべきことは誇り、誇ってはならないことは誇らない、そういう区別が大切なのだと思います。そういう区別が曖昧だと、相手に不快な思いを与えてしまうこともあります。では私たちは、一体何を「誇り」として生きるべきなのでしょうか。

1. 誇りをもって生きる

12 節でパウロは、こう言っています。**「私たちが誇りとすること、私たちの良心が証ししていることは、私たちがこの世において、特にあなたがたに対して、神から来る純真さと誠実さをもって、肉的な知恵によらず、神の恵みによって行動してきたということです」**。

パウロが「誇り」としていること、それは「この世において」、特にコリント教会に対して、「神から来る純真さと誠実さをもって、肉的な知恵によらず、神の恵みによって行動してきた」ということです。パウロは、特にコリント教会に対する自分のこれまでの行動を「誇り」としているのです。

パウロはここで、自分の行動を「誇り」としているので、一見すると、それは「自慢」のように見えます。しかしパウロはここで、決して「自慢」しているのではありません。なぜならパウロはここで、自分を誇っているのではなく、神様を誇っているからです。確かにパウロは、自分の「行動」を「誇り」としているのですが、それはあくまでも「神の恵み」によるものだと言っているのです。またパウロは、自分は「純真さと誠実さをもって」行動してきたと言っているのですが、それはあくまでも「神から来た」ものだと言っているのです。

つまりパウロは、自分の行動を「誇り」としているのですが、その行動はすべて「神様の恵み」によって与えられたものだ、すべて神様から与えられたものだと言って、厳密には、自分ではなく神様を「誇り」としているのです。

私たちは、何も誇ってはいけないというのではありません。誇ること自体が罪なのでもありません。大切なのは、誰を誇るのかということだと思います。聖書全体は、自分で自分のことを誇る「自慢」を禁じているように思います。パウロは、Ⅰコリント 13 章で「愛」とはどういうものかを語っていますが、そこで「愛」は「自慢」しないものだと言っています。つまり、自分で自分のことを誇ることは、「愛」ではないと言うのです。

またパウロは、Ⅱコリント 10：17 で、**「誇る者は主を誇れ」**と言っています。私たちは、自分のことを誇るのではなく、神様のことを誇って生きるようにと言われているのです。パウロは、「誇る者は主を誇れ」という言葉を、旧約聖書のエレミヤ書から引用していますが、エレミヤ９：23-24 には、こうあります。**「－主はこう言われる－知恵ある者は自分の知恵を誇るな。力ある者は自分の力を誇るな。富ある者は自分の富を誇るな。誇る者は、ただ、これを誇れ。悟りを得て、わたしを知っていることを」**。私たちが誇るべきこと、それは、「主なる神様を知っている」ということです。私たちは、自分の知恵や自分の力や自分の財産を誇るのではなく、唯一の神様を知っていること、神様御自身を誇って生きることが求められているのです。

私たちは、良い大学を出た、良い会社に就職した、仕事で多くの実績を残した、多くの財産を手に入れた、子どもがよく育ったなど、誇るべきことがそれぞれあるかもしれません。しかし大切なのは、それらを自分で手に入れたかのように「自分を誇るのか」、それともそれらはすべて神様の恵みと憐れみによって与えられたものとして「神様を誇るのか」ということです。私たちは、持っている「誇り」を、誰の栄光に帰すのかが大切なのです。ある人は言いました。「私たちは、与えられたものしか持っていません」。私たちが今持っているもの、能力や財産や経験や家族など、それらはすべて神様の恵みによって与えられたものに過ぎません。私たちは自分の力で手に入れたものなど何一つないというのが、聖書が教えていることのように思います。聖書が教えていること、それは自分を誇るのではなく、神様を誇って生きることです。神様の恵みを喜んで、神様の恵みに感謝して生きることです。

しかしパウロは、この手紙の中で、唯一自分にも誇れるものがあるとしたら、それは、**「自分の弱さ」**だと言います（Ⅱコリント 11：30）。なぜなら、イエス様がこう言われたからです。**「わたしの恵みはあなたに十分である。わたしの力は弱さのうちに完全に現れるからである」（Ⅱコリント 12:9）**。パウロは、もし「自分の弱さ」のうちに、イエス様の恵みと力が現わされるなら、「自分の弱さ」こそ、誇るべきものだと言います。

聖書は、「自分の強さ」を誇ることに、警告を与えているように思います。「自分の強さ」を誇ることが、「自慢」なのだと思います。私たちは、「自分の弱さ」を誇り、その弱さのうちに働かれる「神様の恵み」を経験して、それを誇って生きることこそ、求められている生き方なのではないでしょうか。それは、究極的には、「自分の強さ」に頼って生きるか、それとも「神様の恵み」に頼って生きるかという選択なのだと思います。

2. 良心に従って生きる

パウロは、神様の恵みによって生きる人でした。それと同時に、パウロは「神から来る純真さと誠実さをもって」生きる人でした。では、「神から来る純真さと誠実さをもって」生きるとは、どういうことでしょうか。それは、パウロが「私たちの良心が証ししていること」と言っているように、私たちの良心に従って生きること、また私たちの良心に責められることなく生きることと言えるのではないかと思います。

「良心」という言葉は、パウロがよく使う言葉ですが、それは「人間の心の中にある善悪の意識」と言えると思います。私たちは、何か悪いことをすると、誰にも責められていなくても、自分の心が自分を責めます。それは、私たちの「良心」が働いているからです。私たちは、自分の「良心」に反することをすると、自分の心が責められ、苦しみを覚えます。逆に、私たちは、自分の「良心」に従ったことをすると、自分の心に平安を覚えます。

私たちすべての人間の心には、「良心」というものがあります。しかし聖書を見ると、「良心」には、「きよい良心」や「正しい良心」もあれば、「弱い良心」や「汚れた良心」もあるのです。そして、聖書は、イエス様の十字架の血は、私たちの「良心」をきよめると教えています。私たちすべての人間の心には、「良心」がありますが、生まれながらの「良心」は、イエス様によってきよめられなければならないのです。そして神様の御言葉によって、教育され、成長し、「正しい良心」を持たなければならないのです。

例えば、イエス様を信じていない人は、主なる神様以外の偶像の神々を礼拝しても、「良心」の責めを何も感じません。また日曜日に礼拝に行かなくても、心の痛みを感じません。これらの「良心」の責めや心の痛みは、イエス様を信じて、神様の御言葉によって教育され、「良心」がきよめられ、成長したからこそ感じる「良心」の責めや心の痛みなのです。パウロも、イエス様を信じる前は、イエス様を信じるクリスチャンを迫害していたのです。それは、イエス様こそ主なる神様だと知らなかったからです。パウロは、イエス様こそ主なる神様だと信じて、神様の御言葉によって教えられたからこそ、「良心」の責めや心の痛みを経験するようになったのです。

私たちすべての人間の心にある「良心」は、イエス様によってきよめられ、神様の御言葉によって教育され、成長しなければならないものです。生まれながらの人間の心にある「良心」は、アダムとエバが神様に背いて禁断の木の実を食べた時から、うまく機能しなくなってしまったのです。私たちの心に正しく働かなくなってしまったのです。

私たちは、神様の御言葉によって「良心」が教育され、成長していくと、罪の意識が芽生えます。神様がどのような方であり、私たちに何を求めているかを知るようになるからです。そこで私たちは、今まで罪と思っていなかったことが罪であることを知り、自分が罪人であることを知るようになります。しかし私たちは同時に、イエス様が私たちの罪のために十字架で死に復活されたことによって、イエス様を信じる時にすべての罪が赦されることを知るようになります。私たちは、神様の御言葉によって、「良心」が教育され、成長していく

と、罪の意識が芽生えますが、同時にイエス様の十字架と復活によって、すべての罪が赦されることを知り、「良心」の平和、平安を得ることができるのです。私たちは、イエス様を信じる時に、「良心」がきよめられ、神様の御言葉によって「良心」を教育し、成長していく時に、「きよい良心」「正しい良心」を持って生きることができるようになるのです。

パウロは、イエス様によって「良心」をきよめられ、神様の御言葉によって教育され、「きよい良心」「正しい良心」を持っていました。パウロは、その「良心」に対して、「純真さと誠実さ」をもって生きてきたと言うのです。つまり、イエス様によってきよめられ、神様の御言葉によって教育された「良心」に、何の責められることもなく、真っ直ぐに従って歩んできたと言うのです。特にコリント教会に対しては、そのように歩んできたと言うのです。パウロは、そのように、神様の恵みによってきよめられ、教育された「良心」に真っ直ぐに従ってきた自分の歩みを「誇り」としているのです。

3. 主イエスの日を思って生きる

13-14 節でパウロは、このように言っています。**「私たちは、あなたがたが読んで理解できること以外は何も書いていません。あなたがたは、私たちについてすでにある程度理解しているのですから、私たちの主イエスの日には、あなたがたが私たちの誇りであるように、私たちもあなたがたの誇りであることを、完全に理解してくれるものと期待しています」**。

ここで「誇り」ということに関して分かることは、パウロは、コリント教会を「誇り」としていて、コリント教会もやがて自分のことを「誇り」としてくれることを願っているということです。つまり聖書は決して、人を誇ることを禁じてはいないということが分かります。クリスチャン同士が互いに誇り合うこと、牧師と教会が互いに誇り合うこと、また親子が互いに誇り合うこと、それを聖書は決して禁じておらず、むしろそれを望んでいるのです。

パウロとコリント教会の関係は、この時、必ずしも良い関係ではありませんでした。コリント教会のある人たちが、パウロを非難したり、批判していたからです。ですからパウロは、今はある程度、コリント教会は自分のことを理解してくれているけれど、イエス様が再び来られる世の終わりの時には、コリント教会が自分のことを完全に理解してくれて、自分のことを「誇り」と思ってくれることを願っていると言うのです。

私たちは、互いに誇り合うことが求められています。しかし現実には、人を誇ることよりも、自分を誇りたいのが私たちです。私たちは、「自分の強さ」を誇ること、「自分の強さ」が人から誇られることを何よりも願うのです。しかし、「主イエスの日」、つまりイエス様がこの地上に再び来られる世の終わりの時に、最後の審判があります。私たちはその時に、何を「誇り」としてきたのかが問われるのだと思います。

私たちはその時に、人から誇ってもらえるような歩みを、今、しているでしょうか？私たちがもし、「自分の強さ」ばかりを誇って、「自慢」ばかりをしているのなら、おそらく誰からも誇ってもらえないでしょう。しかしもし私たちが、「自分の弱さ」を認めて、「自分の弱さ」を誇り、「自分の弱さ」に働かれる神様の恵みと力を誇って生きるなら、誰かが私たち

を誇ってくれるでしょう。また私たちがもし、イエス様によって「良心」をきよめられ、神様の御言葉によって教育され、成長した「正しい良心」に従って、真っ直ぐに生きるなら、誰かが私たちを誇ってくれるでしょう。

私たちは、自分が天に召される時、またイエス様がこの地上に再び来られる世の終わりの時に、何を誇れるか、誰が自分を誇ってくれるかが大切なのです。そのことを思って、今を生きることが大切なのです。

天におられる私たちの父なる神様。

私たちは人生の中で、様々なことを行ないます。しかし私たちは、最終的に何を「誇り」とするのでしょうか。私たちが、死の時でも、また最後の審判の時でも、耐え得る「誇り」を持つことができますように。儚（はかな）い「誇り」に頼って生きるのではなく、確かな「誇り」に頼って生きることができますように。

この祈りを私たちの救い主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。